

PSYCHOPATH
Psychopath
RUNE-CHAN
Rune-chan

fault – milestone one

“A Flight of Fancy or Perhaps Just a Dream”

サイコパスルーンちゃん

Psychopath Rune-chan



Introduction

例えば…なんて言ってしまうと、キリがないことはわかっている。

人の経歴や世の歴史というものは、一度綴られてしまったら、

何があっても変えることはできないのだから。

でも。

でも、ちょっとだけ。

ほんのちょっとだけ、余興程度の例え話をしてみたいと思う。

例えば、お母さんが――

私のような悪魔の子を育てるのに日々疲弊していたお母さんが、

ある夜、奇しくも、ぐっすり眠ることができていたら？

例えば、私が学校の帰り道に、あの鳥に出会すことがなかったら？

お父さんやルド兄さんが、私の症状のことを隠さずに話してくれていたら？

これは、そんな小さな何かが、ちょっとだけ変わっていたら

「もしもの世界」の話。

ADVISORY

本コンテンツはゲーム本編をクリアした後にお読み頂くとよりお楽しみ頂けます。

PSYCHOPATH
Psychopath
RUNE-CHAN
Rune-chan

fault – milestone one

“A Flight of Fancy or Perhaps Just a Dream”

サイコパスルーンちゃん

私は子供の頃から少し変わっていた。
周りの人間曰く「感情が希薄で、人に共感することができない娘」とのことだ。

人情や思い遣りといったものは、理屈は把握できている、実際に感じてはいないのだと。

「人として何か欠落している子だ」と言われた。
心を持たない空っぽの娘であると。

人の動きだけを模倣している、操り師のいない操り人形のような存在だと。

だが、私は幼心にも、それはおかしいと思った。

なぜなら、本を読んだり人の話を聞いたりする際、その内容に納得したり反対したりできるからだ。

その『納得』の度合いにも様々な強弱があり、場合によっては強いナニカに掻き立てられることさえある。

赤く鮮烈であると同時に、黒く陰湿で、燃え上がってはニスのように意識に粘着する、ナニカ。

一度始まると、もう止まらない。

私のどこから生まれてくるその強烈なナニカを満たすもの——それは動いているものが突然止まる時。

多くの可能性を秘めているものが再生不能になるまで壊

されたり、かき消されたりする時。

ナニカが現れると、私はなにかが「停止」するまで、夢遊病者のように家や街中を徘徊し続ける。

破壊衝動のある娘。

人の感情を持たない、悪魔の娘。

気持ち悪い。

怖い。

迷惑だ。

あっちへ行って欲しい。

異端者のレッテルを貼られた私の噂は瞬く間に街中に広まった。

いつ爆発してもおかしくない、ゼヴィッツ家の悪魔の娘。

いつ誰かを殺めても、誰も不思議に思わない。

それがしばらくの間、私のアイデンティティだった。

当然ながら、家族は私の対処に困った。

兄は私とはかけ離れた、心優しい少年なのに、どうして

娘はこのように粗暴に育ったのだろうか。

接触の仕方を間違えれば悪化させるのではないだろうか。

か。

一時的なものであり、歳をとるにつれて治っていくもの

なのではないか。

優しい話し合いから厳しい仕置きまで、あらゆる育成の試みは全て無意味と化し、家族はお手上げ状態となった。

そんなある日、父は私をラボ9へ連れ出すことを決意した。

泣き喚き暴れまくる私を無理やり連れて行った結果、確

固たるとある事実が浮上するのだった。

——やはり、私は脳に異常があるらしい。

ゼヴィッツ社の発明であるMRIがそう示したのだ。

周りの人間が正しかった。

街中の人間が睨んでいた通り、私の脳には感情を司る部位が欠落しているのだった。

父は何を思ったのか、しばらくこの真実を家族から隠した。

ある日、知人と軽い仲違いをした私は、ナニカの衝動を抑えられず、道端のパワーグリッドを破壊してしまった。

それは最新のもので、カディア市の一部の照明器具を稼

働させるのに欠かせないものであった。

配線やプラグやマナの詰まった高級なセディメント。

これらを破壊すると、生き生きとしていた町の一角がいきなり静まり返った。

すると不思議な感覚に襲われた。

いつもなら、この程度では済まないナニカが、スッと身を引いていったのだ。

私は破壊行為の証拠をできる限り隠滅し、その場を後にした。

それから数日後の話だ。

父が深刻そうな表情で私を自室に呼び出した。

きつとパワーグリッドの件がばれたに違いない。

衝動的に何かを破壊し、隠蔽するのは慣れていたが、パワーグリッドとなると流星に規模が大きすぎたのかもしれない。

いつも通りのお叱り。

いつも通りの両親の困った顔。

いつも通り、互いに何も理解できない。

そう思いながら、私は重い足を父の部屋へと向けた。

「ようルーン。ちょっとそこに座ってくれや」

部屋に入るやいなや、真っ先に違和感を覚えた。



し込んで日々生きるなんて、想像ができない。でも当然なんだよな。ハードが違うんだから、理解できなくて当たり前なんだ」

この時、私は彼が何を言っているのかわからなかった。ただ……

「私の構造に 間違った fault があるって」

……私は欠陥品である。この時はそう聞こえたのだった。「んなことあねえさ。間違っているのはきっと認識の方なんだと思う。『普通』とか『当たり前』とかいう概念の方さ。五体満足である以上、皆平等だと思ってたが、きっとそれは違うんだ……。違うハードを持った人間の思考パターンを、無理やり大多数の人間の『当たり前』にねじ込もうとしようまくいくはずがねえ」

父はため息を漏らしながら椅子の背にもたれかかり、少しだけきまり悪そうに続けた。

「なんで……なんで、こんな簡単なことに気づけなかったんだろうな。お前の場合、物理的な証拠が揃っているのにな」

「……………」

さらに意味がわからなかった。

証拠がある？

父のこの言葉を理解できるようになるのは、もう少しだけ先の話になる。

「お前さ。公園近くのパワーグリッド、ぶっ壊したろ？」

いつものお小言とは違い、父の様子があまりにも陽気だったからだ。

「お前、ちょっと前まで近所の公園で鳥を殺してただろ？」

「!!」
突然、所期していた言葉と全く違う質問に、脳が白で埋め尽くされる。

「異臭の通報があったんだ。腐敗が追いつかない頻度ですつと同じ穴付近に埋めてたらしいな？」

「……………」

父は真つ直ぐと私を見据えるが、私はそれを淡々と受け流し、黙っていた。

「ルーン……よく我慢したな。偉いぞ」

「……」
「またも思いも寄らない言動に惑わされる。」

「……なにを……ですか。なぜ褒められているのが理解できません」

「俺はさ、ルーン」

父が表情を緩め、あっけらかんとした心情を装う。心底困っている時に、涙を見せまいと我慢している時の声色と表情だった。

「お前が何を感じて、何を考えてるのか、俺にはさっぱり分からねえんだよ」

「……………」

「何かを殺したいと思うまでの激情を、そんなに頻繁に押

いつもなら鳥とか小動物とか殺してたのに、どうして今回は物に当たったんだ？」

「……わかりません。これといった理由があるのかどうかすら自分でも理解できていません」

「そうか。そのあと動物は殺したか？ 何かの命を奪おうという衝動は収まったのか？」

「はい。今回はそれで収まりました」

「じゃあ、やっぱり褒められるべきだろう」

「え？」

「いつもだったら生き物に向けられるその痲痺を、ただの物に方向転換できたんだ。これは喜ばしい展開だと解釈するべきだ——」

揺らいでいた父の声に信念が宿る。

「朗報なんだよ、これは……コントロールする方法があるかもしれないってことだ、な、ルーン。わかるか、俺の言うてることが？」

父の言葉を自分の中で少し咀嚼してみる。

「はい。その尺度でしたら、十分に理解できます」

「そうか。それはよかったぜ」

そして満面の笑み。少年の笑みだ。それは、初めて異人との接触に成功した、科学者の顔だった。

「いいか、ルーン。お前はお前をうまく理解できない人間家族に一生愛されるという呪いを受けて生まれちゃったんだ。」

お前にとって、これ以上鬱陶しいことはないかもしれないねえが、理解できるよう頑張るから、お前も俺たちを見捨てな
いでくれ」

「……………」

それから暫くした頃だった。

父は、黙っていたMRIの結果のことを包み隠さず話してくれ
た。

母と口論にもなったそうだが、最後は家族一丸となり、
話してくれることになったそうだ。

もちろんルド兄さんも一緒だった。

話によると、私とナニカのこれまでの『悪事』は全て筒
抜けだった。

多くのものを破壊し、多くの動物を殺してしまったこと
も。

当然なのだ。

ピースキーパーと繋がっているゼヴィッツ家の主人が本
気の搜索をして、小娘一人の行動を把握できないはずがな
いのだから。

その日から父は…いや。

私の家族は、私の中のナニカを否定することをキツパリ

とやめ、私をありのまま受け入れるようになった。

「どうせならその体質も、自分の武器にしちまえばいいん
だ」と父。

「何があっても愛しているからね」と母。

「いつでも、どこでも力になるよ、ルーン」と兄。

私は愛されていた。

何があっても、どんなことが起きても、家族は私を見捨
てなかった。

父と兄は兩人とも聡明であり、母は超人のごとく心の芯
が強かった。

私は圧倒的に恵まれていたのだ。

それからも衝動に負け、さらに動物を殺してしまったこ
ともある。

父が長年かけて作り上げたプロジェクトを潰したことも
あった。

しかしそれでも、父も母も兄も、私を見下したり怯えた
りせず、真っ向から共に悩んでくれた。

そんな想いが奇跡でも起こしたのだろうか。

ある日、頭の中で何かのスイッチが入ったかのように、



私は理解した。

——こんなにも私に愛を注いでくれている人たちに、私から何かを返さないなんて間違っている。取ってばかりでは、均衡が取れていない。そして、それは間違っている。間違っているのだ。

なぜこんな単純なことに、気づけなかったのだろう。感情を理解できない私が「どうしてやってはいけないの」と、問う。

世間は常に「かわいそうだから」と答える。

「あなたも同じことをされたら悲しいでしょう？」

だが、そんな答えなど私に伝わるはずがない。

可哀想や悲しいというものがわからないのだから。

だが、均衡なら理解できる。

私はあなたを傷つけない——なぜなら、あなたは私を傷つけないから。

私はあなたから何も奪わない——なぜなら、あなたは私から何も奪っていないから。

たったそれだけで、父や母や兄が話の中でいつも描写している「現実」の世界が見えた気がしたのだ。

以前父の言っていた「ハード」の話をようやく理解する

ことができた。

この概念が私を突き動かす中核として確立されたときに、私は社会の一員の皮をかぶる準備が整った。社会に溶け込む糸口になってくれたのだ。

「家族で集まってるときは笑顔で」
均衡を保つこと。

「人と話をするときは目を見るんだ。でもあまり凝視はするな。周りを見て自然のリズムを学習するんだ」

これ以上、私に理解しやすい概念はなかった。

「理不尽だからって、大声を出しちゃだめだよ！ 何かあったら僕に話して」

あとは、社会というフレームが生み出す偏見や常識のルールをひたすら体験して覚えていくだけだった。

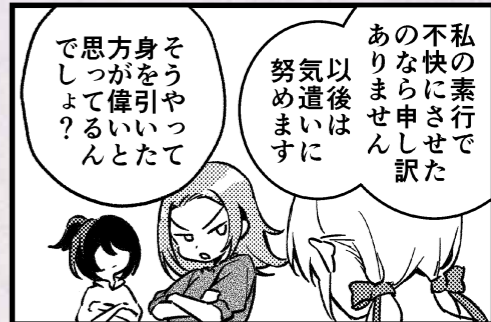
最後の一切れ



数・大局・均衡



いじめ



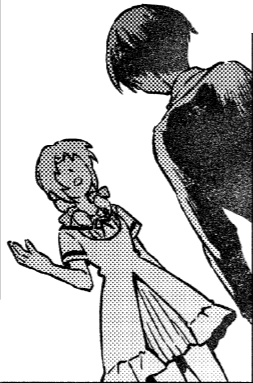
告白



告白か

そのうちされることはわかっていたので、相応の対処ができたと思う

だが、奥歯に何かが引っかかったような違和感がある



本当にこの対処でよかったのだろうか

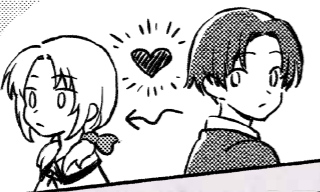


私には、一方的に迫ってきた彼の想いに答える責任も義務もない

だが断るのならある程度の敬意を払う必要があるらしい
自分自身をさらけ出している人間を無下に反しているからだ

本来なら自業自得

勝手に好意を寄せて



勝手に傷つく

恋愛の均衡とはなんなのだ?

理不尽は... ナニカを呼び覚ますキツカケ

ナニカを呼び覚ますキツカケ

上手く解釈しなければ...

制御が不能になる



最後に衝動に駆られそうになったのはいつだったか。

そうだ：あれは子供の頃にアルバスから家庭教育を受けていたときだ。アウターポールの外の世界について書かれた文献があることを知ったのだ。

「外の世界の：文献。外とはどういうことですか？ この国の外に、さらに世界が広がっているというのですか？」

そう尋ねる私にアルバスは一呼吸置いて話し始めた。

「このアウターポールという場所はね、ルーン……」

世の中には、究極の理不尽が存在する。

外に出られない。

このアウターポールから、私は：いや、アウターポールの人間は出ることができない。

一生。

このカゴの中で生きていかなければならない。

なんて不公平なんだろう。

あの衝動は今でもはつきりと覚えている。

胸のざわつきを抑えることができなかった。

某月某日のことだ。

兄が長らく目指していたラボ9への就職が正式に決まっ

た。

ラボ9の研究員になることは、兄の子供の頃からの夢だったので、この機会に見合った特別な祝いものを贈るのが正しい選択だと思った。

特別な贈り物。

家族と相談し、とある物を制作することになった。

「お久しぶりです」

「おう、ルーンちゃんじゃねえか。いらっしやい。例のもの届いてるぜ」

質屋の店主が景気のいい挨拶で出迎える。

「そうですか。指定された時間通りですね」

「はっ。質屋つてのは時間にしっかりしてねえと成り立たない商売なのよ」

店の奥の方へと手招きされ、棚に並べられた商品の中から小ぶりの木箱を店主が差し出した。

「しかしな：ゼヴィッツのご令嬢がこんなしがない質屋に依頼するなんて、何かと思ったが：、ダルキニウム合金なんて、一体どうするんだ？」

「兄が来月、ラボ9の正式な研究員になります。そのお祝いにちょっとしたお守りを作ろうと思ひまして」

店主は眉間にしわを寄せたまま、検討がつかないと言わんばかりに首を傾げた。

「ダルキニウム合金は、肌身離さず持っていることで、持っている人間のピュリファイドマナがごくわずかですが刷り込まれると言われています」

「ああ、しかしセディメントじゃあるめえし、ダルキニウム合金に溜まる程度のマナの量じゃ一生持つても使い物にならねえぜ？」

「マナをエネルギーとして使用するためのものではありません。母と父と私が交互に十日ほど持つことにより、極小ですが、我々全員のピュリファイドマナが一ヶ月程度で刷り込まれます。それを昇格のお祝い用のお守りに加工するつもりです」

そう聞くと店主の曇っていた表情が一気に晴れる。

「かつああああ！ そらなんとまあ、粹な祝いもんだこと！ すげえプレゼントじゃねえか！ いや、そんなもんもらったら一生大切にするだろうな」

店主は心底感心しているようだった。

「それはルーンちゃんが考えたアイデアなのかい？」

「はい。私一人ではできないもので、家族とも相談しましたが」

「やっぱり頭の出来が違うのかねえ：お前さんは天才だよ。ゼヴィッツ家の連中は一体どうなってるんだか」

話を遮るように店のドアが開く音がした。

「たのもう。誰かいないのか？」

「おつと：客が来たみたいだな。ちょっと待っていてくれ。長引きそうなら支払いは後でいいぜ。シドとは近いうちタバーンで会う予定だからな」

そう言い残し、質屋の店主は売り場の方へと出て行った。店主は仕事が早い。

ダルキニウム合金はアウターポールではなかなか手に入らない代物だ。

我々ゼヴィッツのコネクションを使っても、手に入れるまでしばらくかかるようなものをいとも簡単に見つけてしまふ。

ものを探すプロということだ。

前に一度、店主の連絡網について軽く聞いたことがあるが、「世の中には知らねえ方がいいこともあるんだよ」と薄笑いを浮かべ、話をはぐらかされた。

どこまでが本場で、どこまでが冗談なのかわからない雰囲気醸し出す。

質屋のような商売をしていると、心中を相手に読ませないスキルも必要になってくるのだろう。

実際、店主は私の知っている人物の中でも特に何を考えているかわからない人物だ。

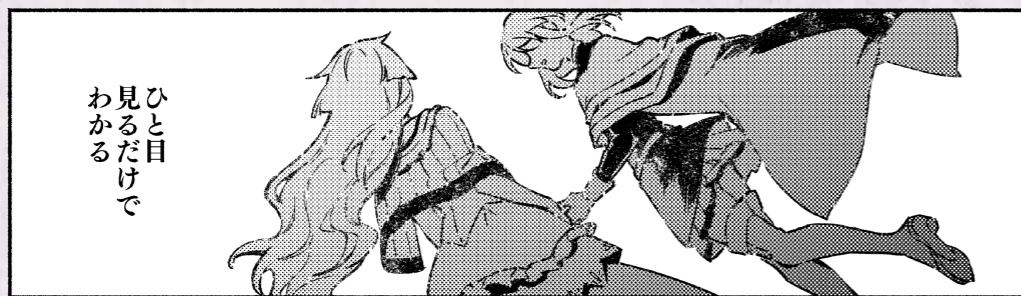
そんな。

そんな瑣末なことを考えながら呆け気味になっていた時だった。



まるで衣装のような
衣服に身を包んでいた。

その二人は、煌びやかな



ひと目
見るだけで
わかる



彼女たちは
カティア市は
おろか

この島の
人間ですらない

彼女たちは…

「お前たち外の人間だろうか？」
 体に稲妻が走ったような衝撃を受けた。
 「悪いが答えられない」
 鼓動が高鳴り、息が止まった。



少なくとも、
「クラス4程度」なんて
言い草はよせ
響きを買うだけだぜ

…忠告感謝する



ズ...

外の人間……

水と食糧の調達。

地図、衣服……そしてセディメント。

二人はこの地域のことを一切把握していなかった。

持ち金の使い方も、どの硬貨がどれほどの価値があるの

か、全く理解していないようだった。

金を持っていることが逆に不自然だった。

きつと先ほどの質屋でなんらかの持ち物を売却したのだ

ろう。

成り行きで売り払った持ち物で、これだけの資金が調達

できたことも不思議でならなかった。

二人は水も食糧も、最高のものを求めた。

地図も、最も情報量の多い高額のものを買った。

した。

買い物中ずっと気にしていた衣服もきつと高級なものを

勧めた方がいいだろうと、グロウリーズ・アパレルに足を

運んだが、若旦那は開店中の時間帯であるにもかかわらず、

店を閉めていた。

きつと、タバコあたりで酒でもかっくらっているのだ

ろう。

しょうがないので衣服は一時的に諦めることになった。

買い物も終盤に近づいた頃、最後に一つだけ必要なもの

があると、バツが悪そうに頼まれた。

セディメントだ。



明らかに戸惑っている二人のために私は道案内を買って出た

どうしても知りたかった

外の世界の人間が一体どういうものなのか

マナを備蓄できる鉱石のことで、その存在自体アウトターポールでは非常に珍しい。

質屋や、そこの雑貨屋で購入できるような代物ではな

い。

本当に……本当にこの二人は、なにも知らない、外の人間。

外の……人間。



セルフィーネ

「リトナ：あの娘の雰囲気…」

リトナ

「わかってます——異心の持ち主ですね」

セルフィーネ

「リトナも気づいてたんだ…」

リトナ

「貴女様のガーディアンですからね。戦闘以外の対人訓練は受けてます」

リトナ

「初対面では疑い程度でしたが、一日を過ごし確信が変わっていった：セルフィーネ様こそ、よくわかりましたね？」

セルフィーネ

「私も一日中疑い程度だったよ。でも別れ際のビルセリオ（無手）で感じちゃった：マナリズムが普通の人と全然違うって」

リトナ

「ほう：アウターポールの人間でも感知できるのですね」

セルフィーネ

「そりゃ、相手だって人間なんだから〜マナは流れてるでしょう〜。私はその流れを感じる程度のことしかできないけど」

リトナ

「王族特有のスキルですね：しかし、セルフィーネ様がそう仰るなら確信が持たということになる」

セルフィーネ

「明日のお昼：どうでしょうか。セディメント持ってきてくれるって言ってたけど」

リトナ

「……………」

リトナ

「私は今日一日、常に彼女の行動を観察していましたが、一切の隙がありませんでした」

セルフィーネ

「それどころか彼女は観察されていることにも、観察されていることに気づかないフリにも非常に慣れているように思えました…」

リトナ

「社会に上手に溶け込めた異心者によく見られる傾向です」

セルフィーネ

「うん、わかっている。何か探りを入れてたよね：言葉のない会話をずっとしてる気分だった」

リトナ

「対価もなくセディメントを譲るなんて裏があるとしか思えません。明日の約束は無視して港に向かうのが賢明かと思われます」

セルフィーネ

「……………」

リトナ

「その顔はなにか懸念されてますね？ フリだったとはいえ、一日仲良くされた方の約束をすっぽかすのは抵抗がありますか？」

セルフィーネ

「うん…でも…異心者となると…ちょっと話は別…かな」

リトナ

(流石に、この程度の分別はついておられるか)

リトナ

「行動が一切読めませんからね、異心者は…動機も想像を遥かに超えることの方が多い」

セルフィーネ

「リトナは、あの娘と戦闘になったら、勝つ自信ある？」

リトナ

「何をいきなり。当然でしょう？ 聞くまでのことですか？」

セルフィーネ

「あはは…はつきり言うね？」

リトナ

「ここがアウトターポールだからです。そういう意味では不幸中の幸いとも言える」

リトナ

「相手がクラフトを使えるならあの娘の隙の無さは警戒すべきですが、ただの生身の人間にクラフト

セルフィーネ

ターである私が戦闘で負けるなどまずありません」

セルフィーネ

「だったら会いに行ってみない？」

セルフィーネ

「今日、彼女は表面上だけでも私たちに優しくしてくれたわけだし」

リトナ

「いや…お気持ちは分かりますが、よした方がいいでしょう」

リトナ

「アウトサイダーである私たちに非常に興味を持っていた…何を企んでいるのかがわからない」

リトナ

「彼女一人だけなら対処できますが、明日指定の場所に彼女一人で訪れるとは限らない」

セルフィーネ

「それにいくら生身の相手だとはいえ、私もこのマナの無い土地で何人相手に戦闘できるか定かでは

セルフィーネ

ありません」

セルフィーネ

「そう…だね。ごめん、ちょっと感情的になってた」

セルフィーネ

「こんな場所でリトナに戦闘のリスクを負わせるなんて、どうかしてたよ」

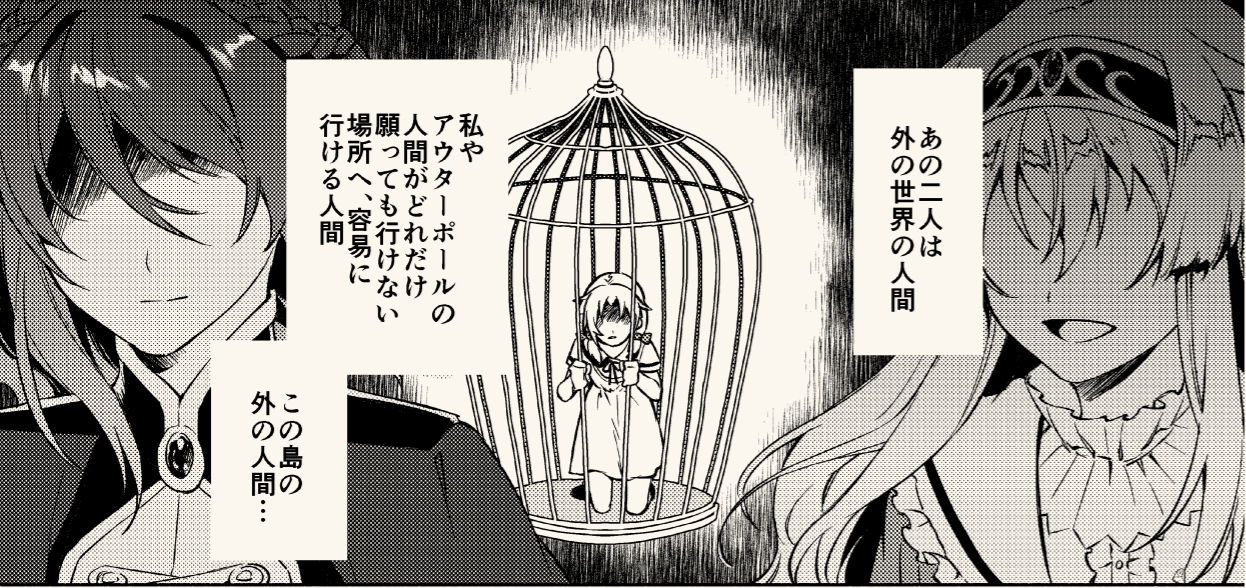
リトナ

「お気になさらず。無理をするのも職務の一環です」

セルフィーネ

「ルーンには悪いけど、リトナの言うとおり、明日は早めに宿を出てまっすぐ港に向かおう」





あのリトナと
名乗った紫髪の女
あれはどう見ても
普通の人間では
なかった

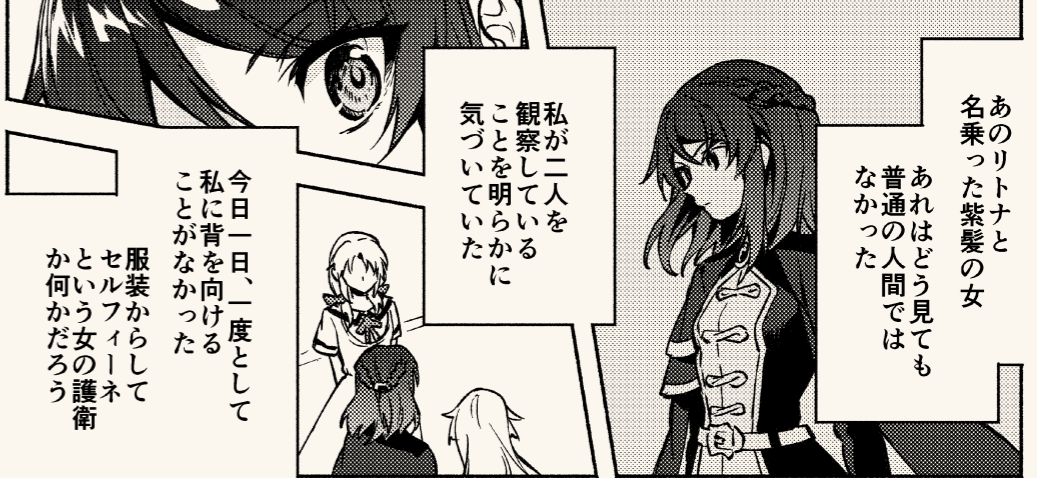
私が二人を
観察している
ことを明らかに
気づいていた

今日一日、一度として
私に背を向ける
ことがなかった
服装からして
セルフィーネ
か何かだろう

あの二人は
外の世界の人間

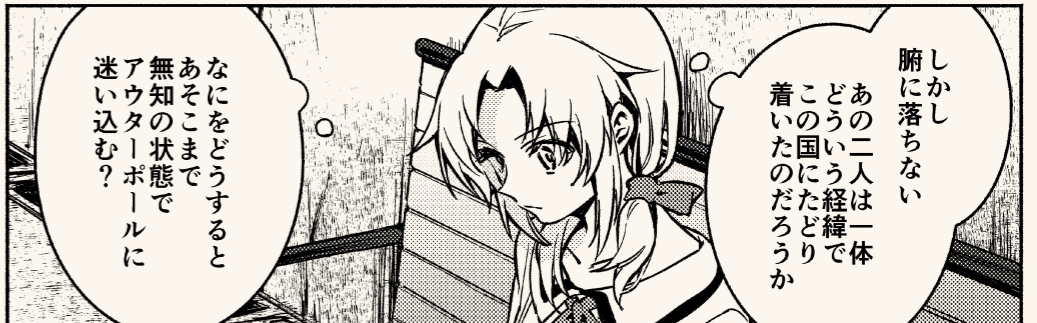
私や
アウターポールの
人間がどれだけの
願っても行けない
場所へ、容易に
行ける人間

この島の
外の人間…



しかし
腑に落ちない
あの二人は一体
どういう経緯で
この国にたどり
着いたのだろうか

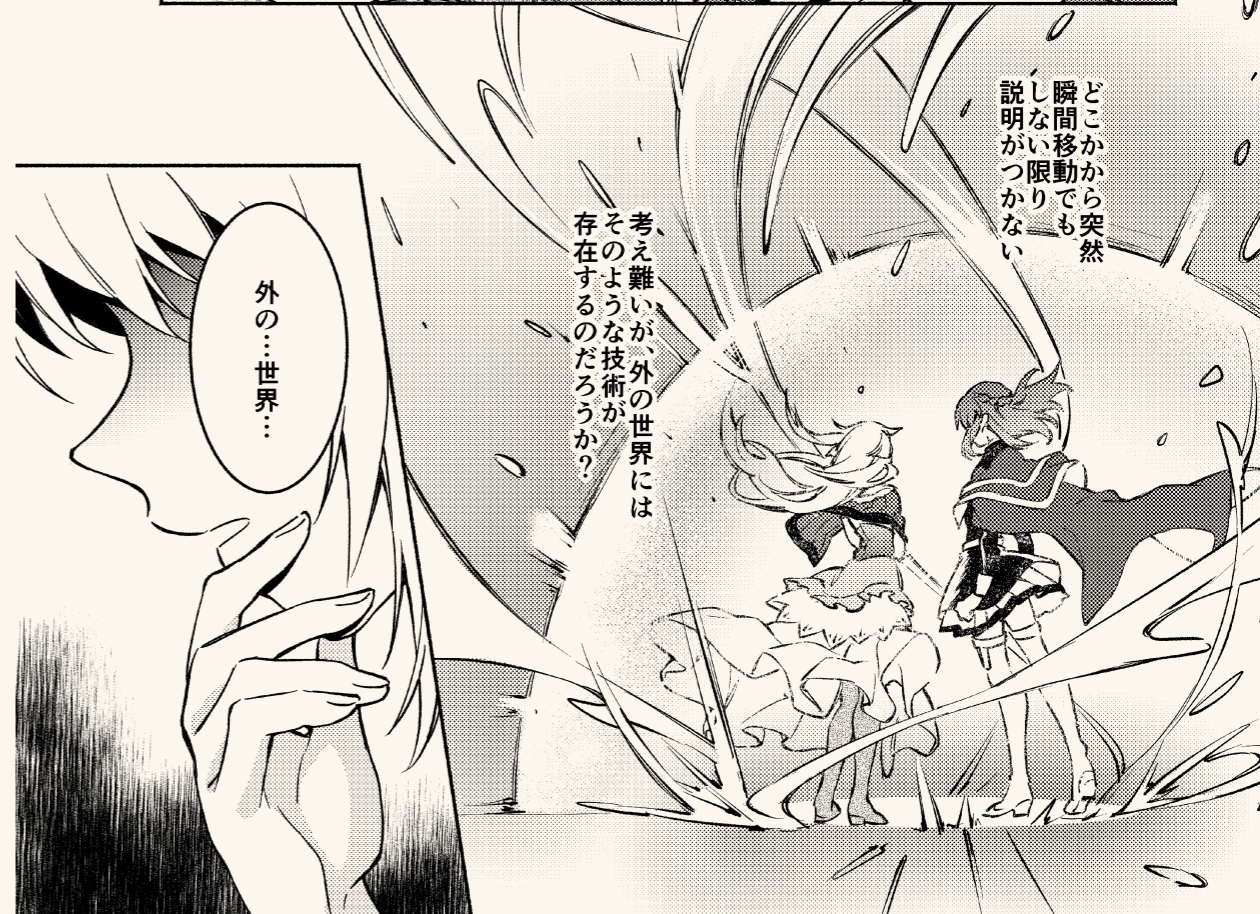
なにをどうすると
あそこまで
無知の状態で
アウターポールに
迷い込む？



どこから突然
瞬間移動でも
しない限り
説明がつかない

考え難いが、外の世界には
そのような技術が
存在するのだろうか？

外の…世界…



壊したい

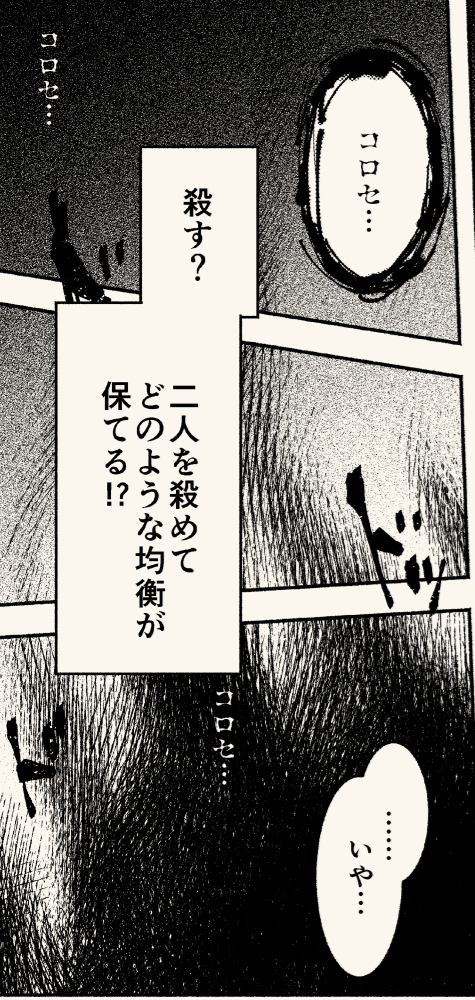
動きを
止めたい

なぜ私は
一緒に
行けないの？

まずい…ナニカが…

抑えないと…

お、抑えないと…



コロセ...

コロセ...

殺す？

二人を殺めて
どのような均衡が
保てる!?

コロセ...

.....
いや...



だめだ
収まらない...

こんな衝動
初めてかも
しれない



だが
あの女には
どうひっくり
返っても
勝てないだろう

一体、何なら
スキを作れる？
こっちにだって
手段はきつと.....



二人は理不尽の
象徴だ

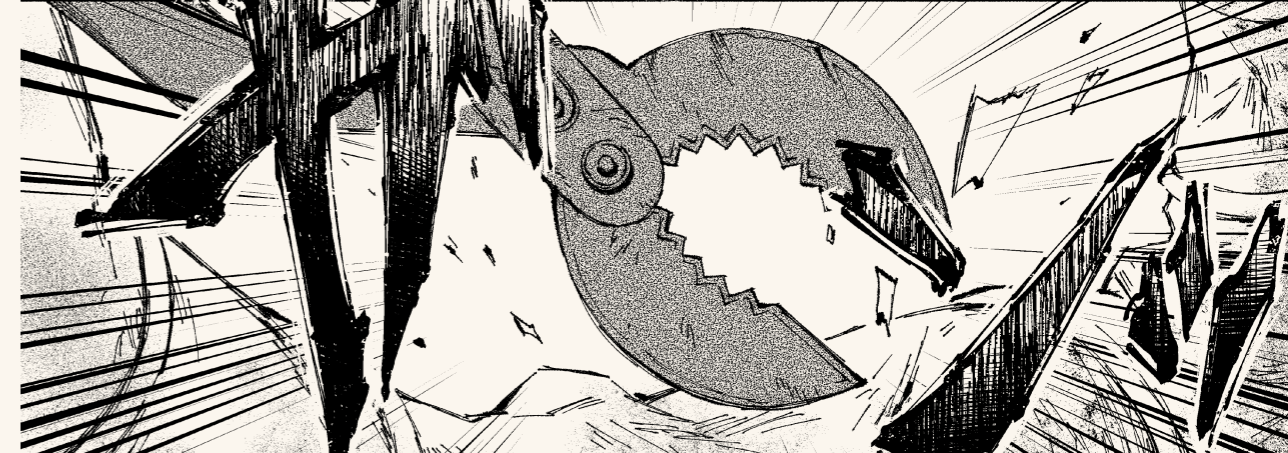
存在自体が
不公平
なんだ!!



ルーン
この時間から
外出か？
どこへ
行くんだ？

ちょっと...
近くまで...

シド
グリッド7の
エリアの明かりが
全部消えたって...





羨ましい

羨ましい

このまま
あの二人は
出ていくのか？

私も外に出たい！
世界を見てみたい！

どうして私は
こんな場所に
生まれて
しまったんだ！？

もう選択肢は一切
ないのか？

私は二人を
見送ることしか
できないのか？

選択肢がない

壁が

壁が
押し寄せて
くる

時間が…

羨ましい



飛び道具…

毒殺

薬殺

刺殺

溺殺

撲殺

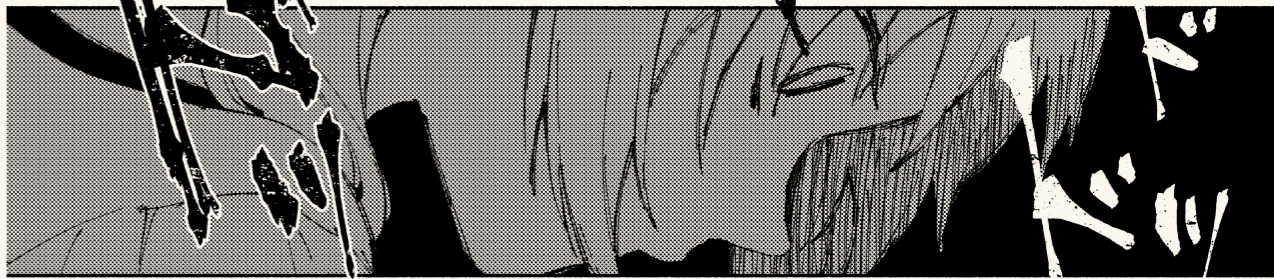
扼殺

射殺

殴殺

圧殺

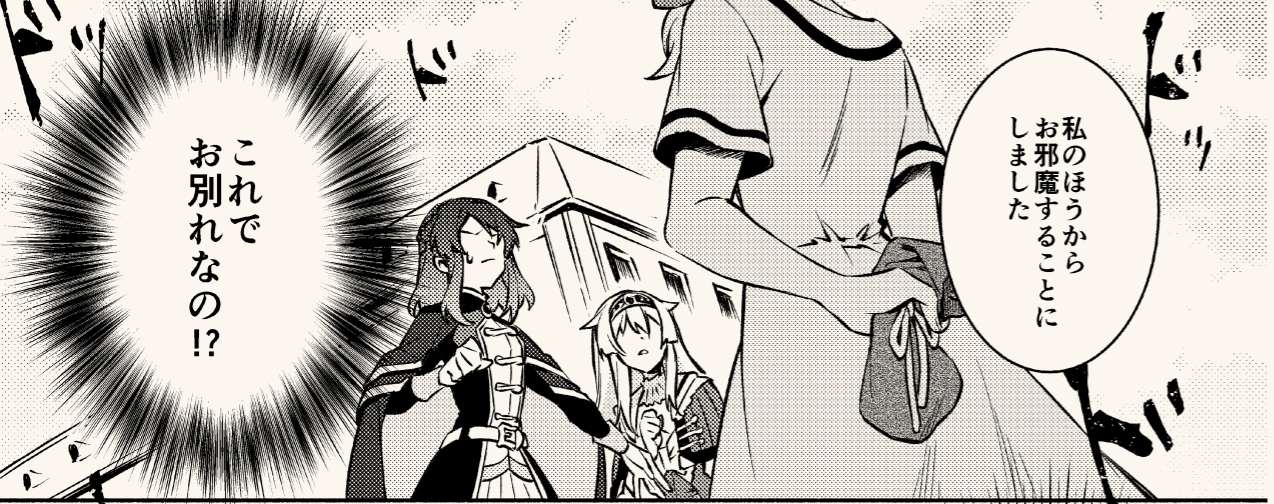
焼殺



だめだ！！
不可能だ！！

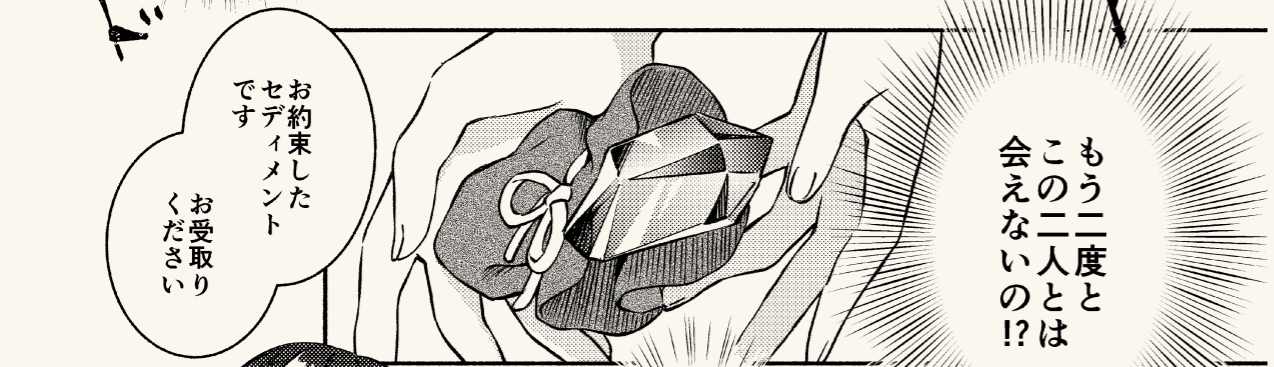
今の私に
あの女を
殺せる方法は…

ない！！



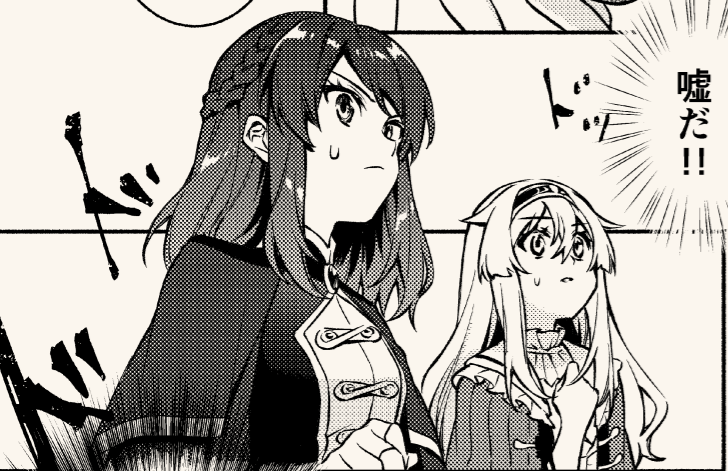
私のほうから
お邪魔することに
しました

これで
お別れなの!?



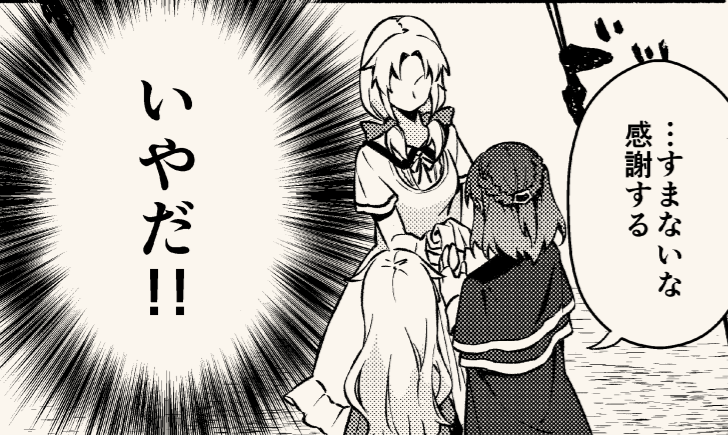
もう二度と
この二人とは
会えないの!?

お約束した
セディメント
です
お受取り
ください



嘘だ!!

嘘だ!!

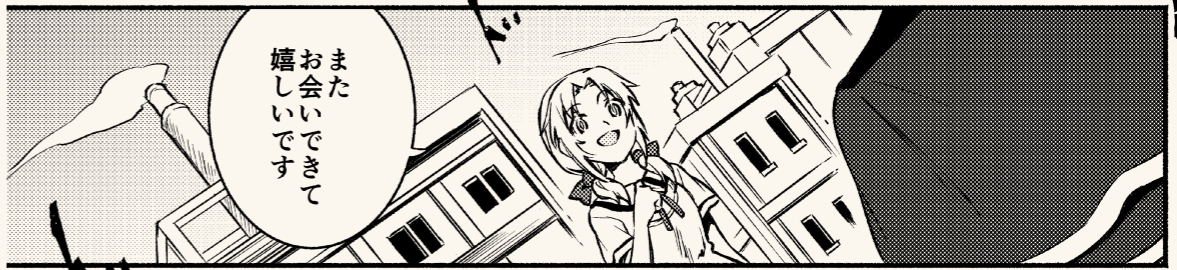
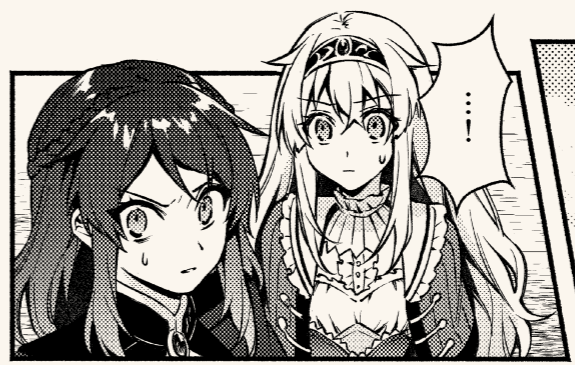


いやだ!!

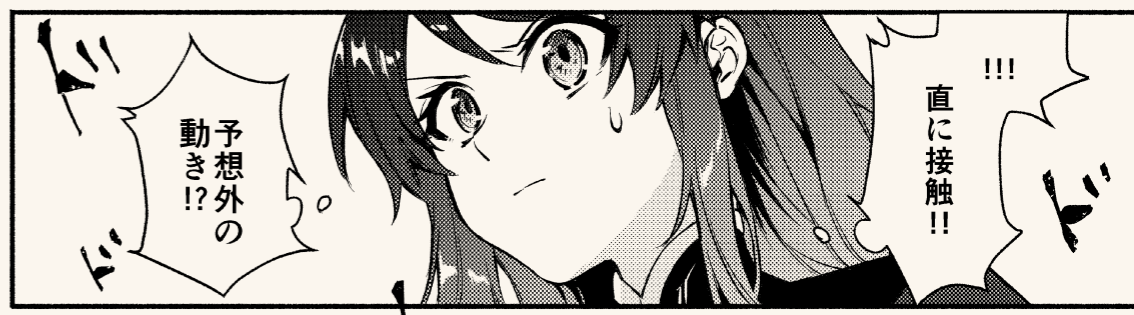
…すまないな
感謝する

嘘だ!!

翌朝



また
お会いできて
嬉しいです



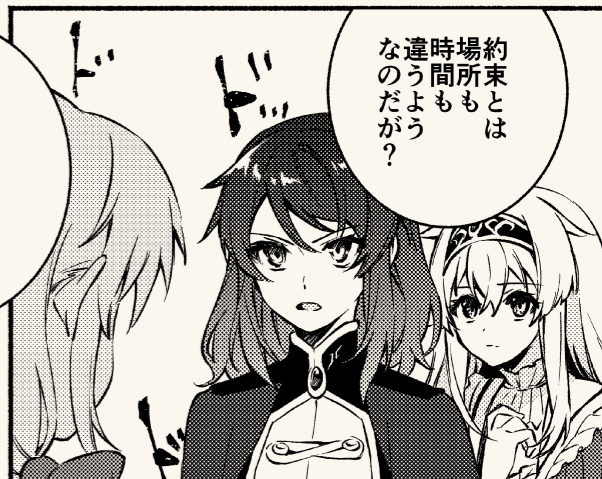
!!!
直に接触!!

予想外の
動き!?

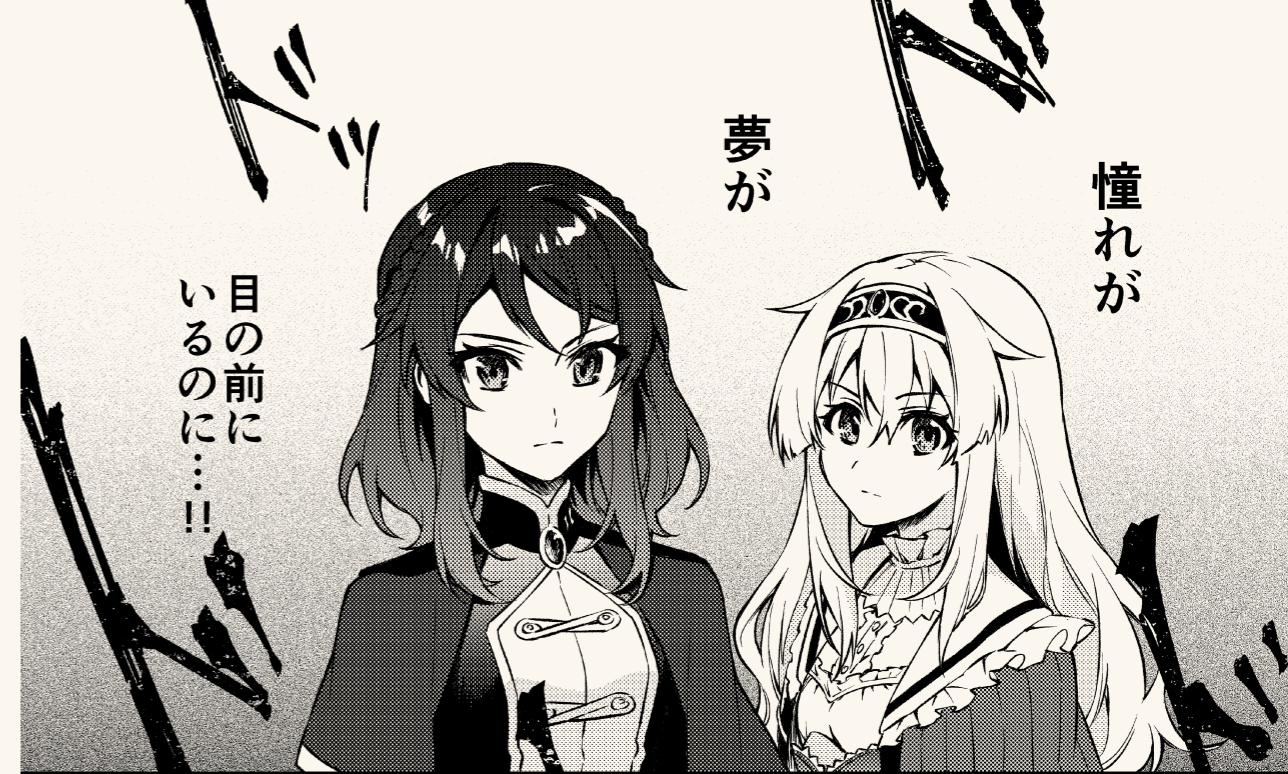
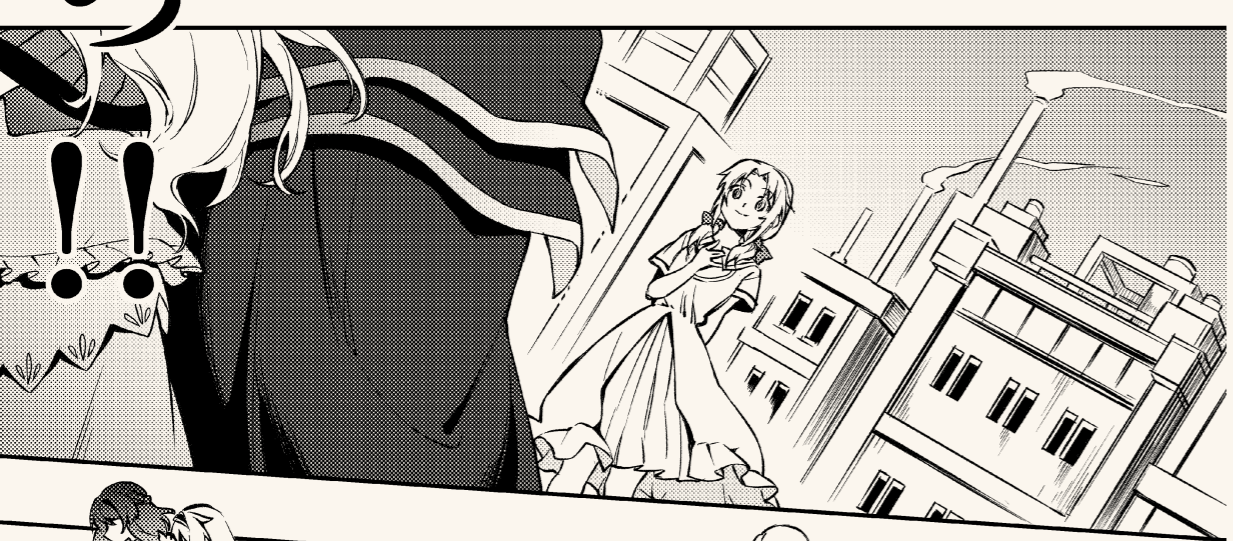


これで…

昨日の様子だと
きつと来て
くれないと
思ったので…



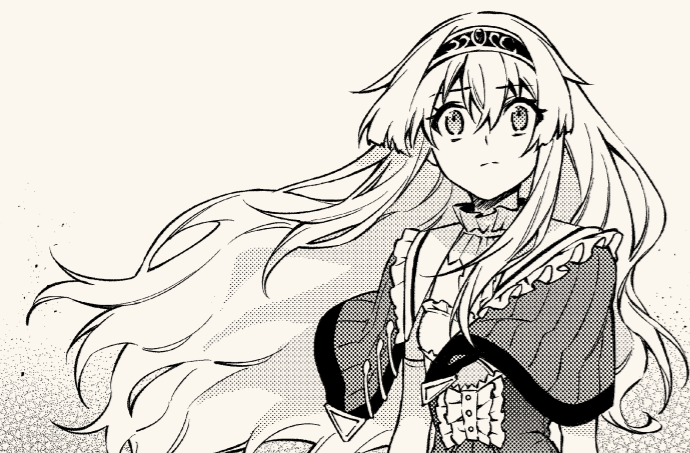
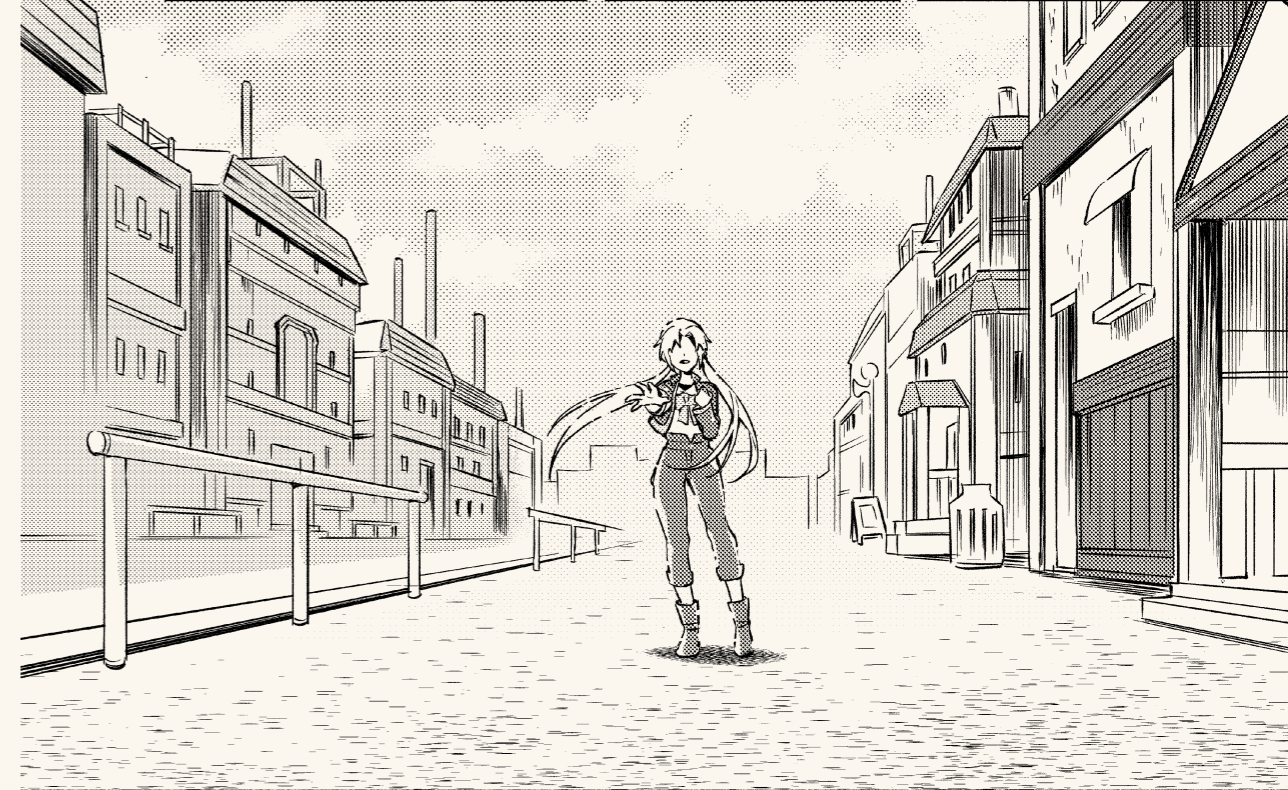
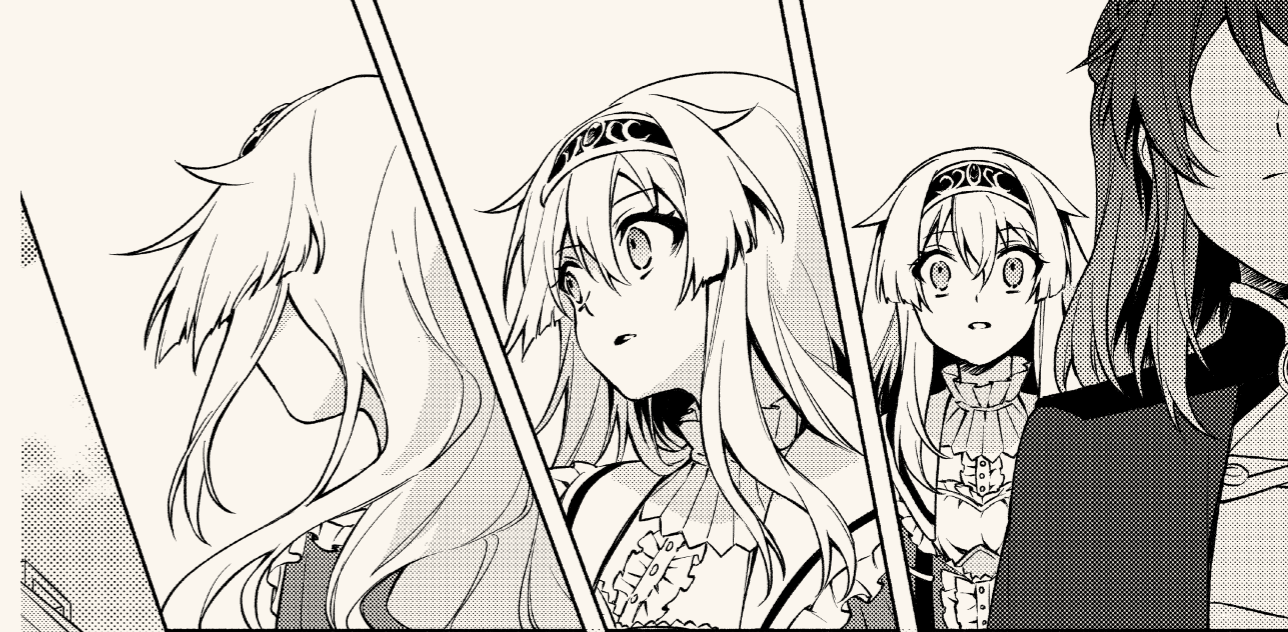
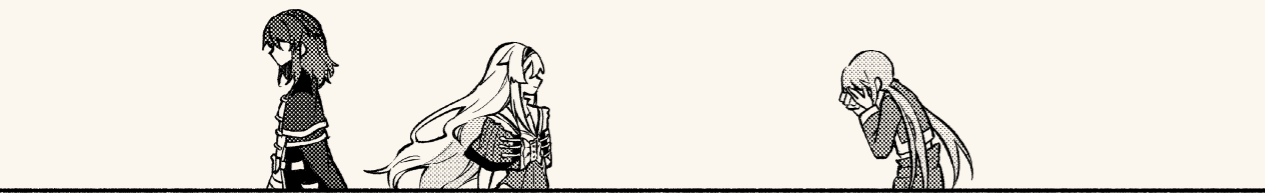
約束とは
場所も
時間も
違ふよう
なのだが?

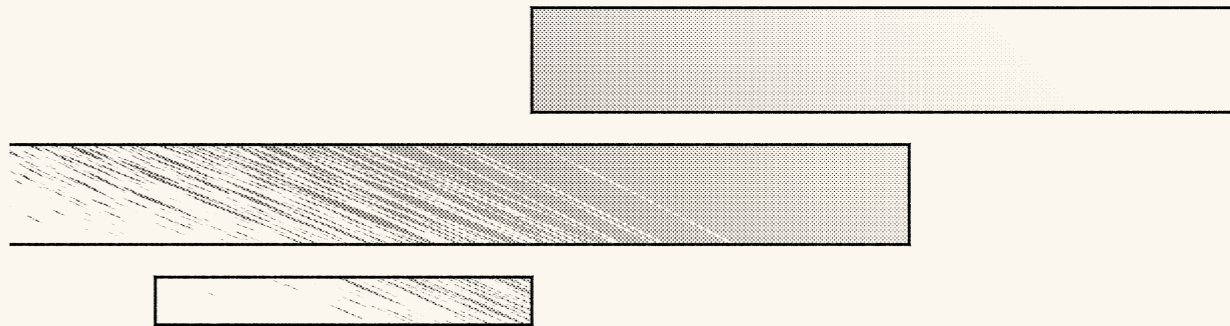
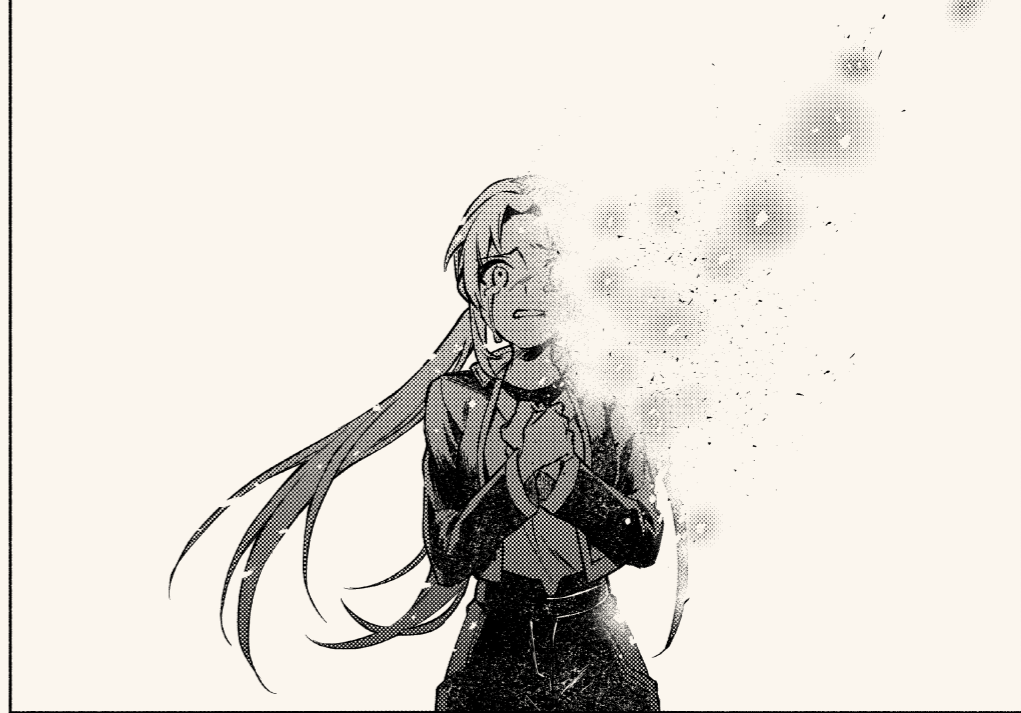




泣いていかないで

さくら





PSYCHOPATH
Psychopath
RUNE-CHAN
Rune-chan

fault – milestone one

“A Flight of Fancy or Perhaps Just a Dream”

2020年10月発行

サイコパスルーンちゃん / Psychopath Rune-chan

制作：

ALICE IN DISSONANCE

シナリオ / ディレクション：

Munisex

漫画 / 挿絵：

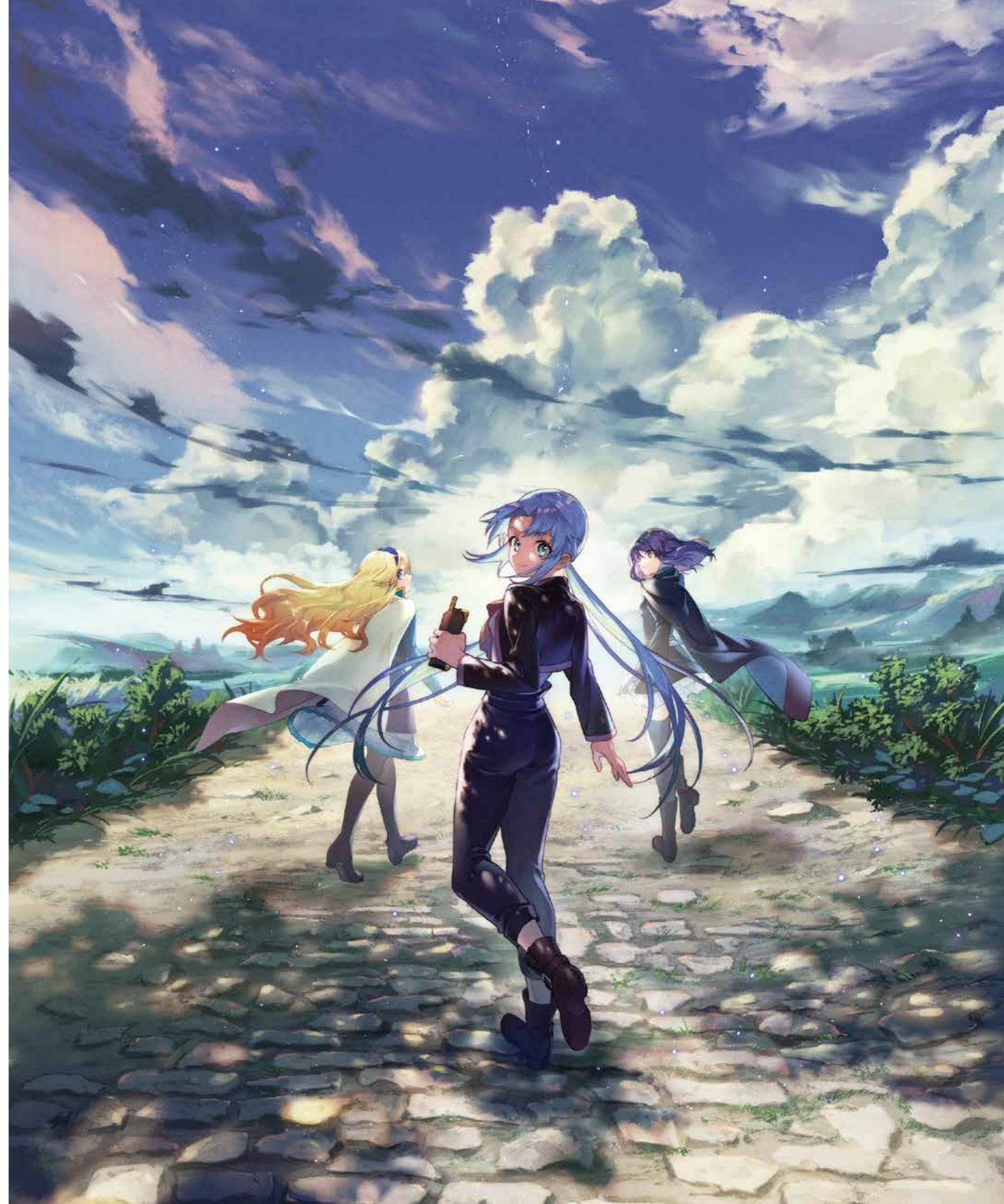
小夏はれ

デザイン：

竹田 翔

©ALICE IN DISSONANCE

無断転載・複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます。





fault – milestone one

Psychopath Rune–chan